

6 歳児におけるゆるしの機能の理解

戸田 梨鈴

【序論】 ヒトは非常に社会的であり、他者との協力的な関係性に依存して暮らしている。したがって、この協力的な関係性が何らかの違反行為によって脅かされてしまったとき、関係性を修復することが必要となる。そのためには、謝罪などの違反者からの働きかけに加え、ゆるしという被害者からの働きかけが必要不可欠である。ゆるしに関する発達研究では、ゆるしは4歳ごろからみられ、5歳になると違反者に関する社会的情報を考慮した上でゆるしを行うことができると示されている。しかしながら、子どもがゆるしをどのように捉えているのかについては明らかでない。小学生以上では大人と同じようにゆるしを理解していることが示されているが、ゆるしがみられ始める頃の幼児については明らかになっていない。

ゆるしの定義に基づくと、ゆるしには大きく2つの機能があると言える。1つは、違反者との崩れてしまった関係性を再構築することである。もう1つは、被害者の違反者に対する否定的な感情を好意的なものへと変化させることである。本研究では、6歳児がこの2つの機能について理解しているかを調べることを目的とした。6歳児は関係性の再構築と感情の変化という2つの機能を理解しているという仮説を立て、支持されるかどうかを検討した。また、幼児のゆるしに対する理解と実際の行動との関連についても明らかにされていない。本研究では、ゆるしの機能に関する理解度が高い児は、実際に自分が被害者となる場合でも違反者をよりゆるすことができるという仮説を立て、その可能性を検討することを目的とした。

【方法】 本研究は、幼稚園の年長クラスの児49名を対象に、以下の課題を実施した。実験1では、児の言語能力が物語やゆるしの機能の理解に影響を与える可能性を考慮し、児の言語能力を測る課題として絵画語い検査を行った。続いて、主人公が違反行為を受け、違反者からの謝罪に対してゆるす、またはゆるさないという二種類の物語の読み聞かせを行った。読み聞かせの途中、主人公の違反者に対する好意度と、予測される物語の結末について質問し、児がゆるしの持つ機能について理解しているかを検討した。実験2では、児が使うはずであったお絵描きシートが他の児によって使われてしまった、という違反行為場面を実施した。その後、お絵描きシートを使った違反者に児が何枚のシートを返却したかを、ゆるしの程度を示す尺度として記録した。実験1の結果に基づいて参加児をゆるしの機能の理解度高群と低群に分け、群間でシートの返却枚数、つまりゆるしの程度に差がみられるかを検討した。

【結果・考察】 実験1の結末に関する質問において、違反者をゆるした物語では主人公と違反者が一緒に遊ぶ結末を選び($p < .001$)、ゆるさない物語では別々に遊ぶ結末を選んだ($p = .021$)。よって、6歳児はゆるすことにより違反者との関係性が修復されると理解していることが明らかになった。また、好意度に関する質問では、ゆるした物語では違反者に対する好意度が否定的なものから好意的なものへと変化していた($p < .001$)のに対し、ゆるさない物語では好意度は否定的なものから変化しなかった($p < .001$)。従って、ゆるすことにより被害者の違反者に対する感情が、好意的なものへと変化すると理解していることも示された。なお、全ての回答において言語能力および性別との関連は見られなかった($p > .05$)。

実験2では、ゆるしの機能の理解度高群と低群の間に、ゆるしの程度に差は見られなかった($p = .890$)。よって、ゆるしに関する理解と実際の行動との関連は示されなかった。その理由として、ゆるしに関する理解を支える認知システムと、実際のゆるし行動を支える認知システムが異なっていることが考えられる。

以後の研究では、5歳児を対象に同様の実験を行うとともに、ゆるしを構成するその他の要素についても検討することで、子どもの持つゆるしとその発達について理解を深めたい。(比較発達心理学)